

ヨーロッパでは、火山の影響で飛行機が飛べない状態が続きました。墓石を削って文字を彫るのに砂を吹き付けます。この状況が飛んでいる飛行機のガラスに起こって視界が真っ白になってしまうので飛べなかったのです。私たちはこの様に、目の前が色々な慌ただしい状況になると物事が見えなくなってしまいます。ですから、心の騒ぎを除いて、神さまからの言葉に耳を傾ける必要があります。(Ⅱ列王18：1～7、20章全部) ヒゼキヤは凄惨な人で、初めて水道を作った人です。本当に知恵ある王の1人で、「ユダの王の中で後にも先にも、こんな王はいなかった」と、神さまに言われている人が病気になるのです。ヒゼキヤは素晴らしい人で、どこに戦いに行っても負けることはありませんでした。私たちがやることは100戦100勝でしょうか？神さまに従ってれば失敗はありません。結果的に全てが益となると聖書は言っています。みなさんは、自らの歩みに対してヒゼキヤのように説明ができる人生を送ってきませんか？ヒゼキヤは、外部から来る問題には非常に強かったです。自分の先祖がやってきた偶像礼拝を全部やめて、おまけにネフシタン（モーセの作った青銅の蛇）も、国民がその蛇そのものに香をたいて拜んで偶像化していたので壊しました。しかし、このヒゼキヤは病気がかかります。外部から来る問題にはこれ程強くて攻撃されることの無かったヒゼキヤですが自らが病気がかかった途端、涙を流して祈り始めます。神さまもヒゼキヤを愛していたので祈りをきかれます。聖書の中で、これだけ激しく神さまを求めて涙を流して祈る箇所はゲッセマネでのイエスキリストの祈りとこのヒゼキヤの箇所だけです。この2つの箇所は対比で出ています。どちらの祈りにも神さまは働きました。イエスキリストの場合は「あなたの御心のとおりにしてください」と言ったので彼は御心のとおりになりました。そして彼は全ての長子になりました。ヒゼキヤの場合、預言者は「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。」と言いました。神さまの時だったのです。次に譲る時だったのです。しかし彼は、「私はずっとあなたに従ってきたではありませんか」と言って寿命を15年延ばしてもらいました。彼にとって寿命を15年延ばしてもらったのが喜びだったのかも知れませんが、神さまは、その15年を知っていたので彼の命を取ることにしたのでしょう。でもヒゼキヤは、悶えて泣いてそれを願いませんでした。ですから神さまはその願いをきかれました。するとヒゼキヤは「本当に、3日目に主の宮に上れるなら、しるしは何ですか？」と言います。イザヤは「日時計の影が10度進むか戻るかです。」と答えると、さらにヒゼキヤは「影が10度伸びるのは容易なことなので、10度戻るようにしてください。」と言います。あれだけ神さまを信じて、約18万人の敵を夜の寝ている間に御使いによって全滅された奇蹟を体験してきたのに、自分の命に対して、それを見ることができませんでした。信仰の強い人には、とかくこういう事があります。人のためには真剣に祈れるし自分に任されたことには強く立つことができるけれども、いざ自分に起こった問題に対して対処できないのです。ヒゼキヤは、ひどい状態にある北イスラエルに、国は違っても礼拝だけは一緒にしましょうと働きかけをしていた素晴らしい王でした。そんな素晴らしい王に対して起こったことが今までの話です。この祈りによって伸びた15年の間にバビロンの使者がお見舞いに来ます。バビロン補囚の元です。ヒゼキヤは嬉しくて彼らに全ての宝庫、銀、金、香料、高価な油、武器庫、ヒゼキヤの宝物庫にある全ての物を見せてしまいます。ヒゼキヤの時代には仲が良かったので攻められませんでした。ヒゼキヤの息子の時代には攻め入られます。バビロンは、ヒゼキヤの案内のおかげで南ユダの王宮の事を全て知り尽くしていたからです。もしヒゼキヤが15年間生きていなければこんな事は起こっていませんでした。イザヤがヒゼキヤに「彼らはあなたの家で何を見たのですか？」と尋ね、ヒゼキヤは「私の家の中の全てを見ました。私の宝物庫の中で彼らに見せなかった物は1つもありません」と答えました。するとイザヤは「あなたの息子たちのうち、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう」と伝えます。これを聞いたヒゼキヤは「あなたが告げてくれた主の言葉はありがたい」と感謝します。ヒゼキヤは、自分が生きている間は平和で安全ではなかろうかと思ったからです。普通は子孫も後々まで幸せに暮らして欲しいと願います。しかしヒゼキヤは、クリスチャンとして生きる中で道を誤ってしまいました。ヒゼキヤは自分の目の前に起こった問題に対して神さまに泣いて祈りました。しかし、彼に神さまの御心は関係ありませんでした。だからイエスキリストのように「この杯を私から取り去ってください」と祈っても、「あなたの御心のようになさってください。」と祈ることはありませんでした。生きるのは神の栄光、また死ぬのも益であると言った言葉もありますが、これがヒゼキヤには無くなってしまいました。私たちクリスチャンは今日死んでも明日死んでもよいという状況にあるべきです。それは、私たちには自らの命を1日でも延ばすことはできないし縮めることもできないからです。神さまの時はいつか分かりません。自らの命を延ばすことのできない人間の中に失ってしまったものに対する欲があるのです。それがアダムとイブの時に失われた永遠に生きたいという欲です。ソロモンも「人は永遠を思う。しかし人の永遠を人ははかることができない」と言っています。こういう状況にあっても私たちは永遠を求め、神さまを信じてると言いながら自らの人生は自らのものと思っているのです。ヒゼキヤのようにどれだけ素晴らしい王と言われても、目の前に大きな問題・壁が立ちただかると、こういう弱さに陥りがちです。神さまが時だと言えばその時です。15年生きながらえられても、この15年の間に彼は敵国に自分の国の全てを教え、自らの国を失う方向へ導いてしまいました。方向を戻し、正しい方向へ国を導き、正しい道を民に教え戦いに勝利してきたヒゼキヤですが、その勝利して得た全てものを敵に渡す15年になってしまったのです。45年で終わってれば彼は失敗の無い、水道を作り、新しい技術を考え国々を治めた最高の王で終われたにもかかわらず、彼は残りの15年で全てを失う形になりました。みなさんはいかがでしょう？神さまに祈る時に本当に神の御心を求めて祈れているのでしょうか？あなたの願い事を神さまに求めることは大事ですが「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれる御業を、初めから終わりまで見きわめることができない。」と書かれています。だからソロモンは「空の空。すべては空」と言っています。ソロモンはその虚しさの中でどう生きたかということ、神の知恵によって「私はそれに従うんだ」と言って生きてきました。神さまに聞いていけばいいのですが、経験が積み重なると自らの功績が目に見えてしまいます。私たちは自らの生きる人生にあって自らは何の役割を持っているのかをしっかりと理解し神の時が来た時にそれを譲り、また、あなたのやっていることが神さまの前に正しいかをしっかりと学んでいないと、せっかく良いつもりでやっけても全てが台無しになってしまいます。祈りの中に自分ではなく「神さまの御心Sのままに」があるのでしょうか？悪魔は、私たちの素晴らしい事に対しても働いてその素晴らしいことを全て無駄にしたいと考えています。私たちが自らの役割を果たす中で、本当にそれが正しいことであるかを確認してください。これを誤ると実が悪いです。聖書の中に、正しい事が正しくない事は実を見て見極めなさいと書いてあります。私たちがとっている行動が良い実を結んでいるのか悪い実を結んでいるのか改めて確認して欲しいと思います。神に忠実な者とは…正しい事をやっているつもりでも自分よがりでは意味がありません。イエスキリストの祈りには感動が

ありますが、ヒゼキヤの祈りには人間味があります。ヒゼキヤは神さまからの奇蹟を体験しても自分の病気に対して保証を求めました。私たちもしませんか？『「信仰は望んでいることから保証し、目に見えないものを確信させるものです。」とされているので信じます。』と、言いながら「でも神さま、その保証はどこにありますか？」と祈っていませんか？私は神さまの御心を祈ります…でもこうしたい！と言っていないですか？それでも神さまは、その願いに対してきかれるお方です。神の時に従うかそれとも従わずに自らで動いてしまうか、どちらでしょうか？人間的に解決しようとししないでください。①神の方法に目を向けましょう。あなたはいつも神さまの方法を求めていますか？どれだけ知恵を積んで知識を蓄えてもこの世の賢さは神の愚かさには届くことすらできません。だからその程度の知識で神の働きを否定してはいけません。自分の考えで「この生き方をしていない人は駄目なんだ」と言ってはいけません。神さまはその駄目な人でもこの世の王とする事ができるのです。神さまは羊飼いのダビデを王にしました。私たちは神の方法を見ましょう。今までに奇蹟が起こった理由は、そして聖書のある理由は今まで神さまがどういう方法で解決してきたかです。立派な方法でしたか？「神のなさる事は人の目には愚かな事である」と書かれています。みんな人から見れば愚かで考えられない事でした。だけど結果的に聖書の中で全て愚かに見えません。一番の奇蹟はイエスキリストが十字架にかかったことです。この時代の人々にとってイエスキリストは立派な人でしたか？ユダヤ人にとって彼は愚かな人でした。だから十字架にかけました。神さまは考えられない事を通して奇蹟を起こします。だから神の方法に目を向けて、後世に恵みを残す…私たちはストーリーメーカーであっても自分の歴史を書いているのではなく、彼の歴史を書き続け、また、後世にそれを委ねる…そのためには神の方法に目を向けましょう。②問題をすりかえるな。これは、私たちが一番多くやってしまう事です。私たちにあって一番嫌な事があります。でも「それは信仰によって乗り越えないと…」と思います。そうすると、どうでもいい事を問題の種にします。悩みを捜す人生になるわけです。こういうことは一番やりやすい事です。問題のすりかえをやって大失敗した人がサウルです。神さまに言われた事を守らなかったので預言者に「栄光は去った」と言われた時、この一番の問題にではなく「民に面目かたない」と言うところに目を向けました。自分の失敗を神の前で悔い改める前に周囲の人に見られて自分の立場が悪くなる事を心配してしまいます。マルタの話も同様です。マリヤがイエス様のそばで話を聞いていた時、自分も聞きたいけど動いていました。そこでもてなす対象のイエス様にマリヤが動かない事を怒ります。本当にマリヤが動かない事に怒っていたのでしょうか？本当に彼女はもてなす事が楽しかったのでしょうか？私たちはよくやってしまいます。問題の本当の原因はここにあるのに、これには触れたくないので、こっちを怒ってみるのです。忠実な者になるためには、問題は問題として起こるんですけど、その問題を見続けなくてははいけません。③時を逃すな。ヒゼキヤが「やっぱり元に戻してください」と言ってももう戻る事はできません。どんなに言っても私たちは日時計を戻す事はできません。ですから、私たちは一度誤ってしまうとその問題は私たちの前に残ります。その問題を祈って解決する事はできますが、失ってしまったもので戻らないものもたくさんあります。だから時を逃さないように生きなければなりません。時を逃さないためには②のポイントが必要です。問題をすりかえていると、その問題が解決できる時に、その問題が解決できません。それに対して問題意識が無いからです。神さまは私たちにあって一番ネックな問題を解決します。今あなたの中に問題がありますか？そして本当にその問題で一番悩んでいますか？そうではないはずですが。私たちに防衛本能があるので、解決できるところの目を向けてしまうのです。ですから、今、思い浮かんだ問題は、私たちにあっては問題ではありません。その問題でないものに悩んでいると時を逃してしまいます。私たちは弱いのです。一番大切なところを見ないで、それよりもどうでもいい事で恥を感じてしまって問題を解決できません。私たちは気をつけなければいけません。私たちはどうでもいい事に目を向けないように、問題をすりかえないで、神さまの方法に目を向けていきたいと思います。（要約者：行司佳世）